共同研究で共著論文を共創する強み

研究誌を企業面接で提示できる誇り

職業教育と研究と就活のマッチングの妙

わたしたちのまなび

名古屋産業大学（高木弘恵学長）では、多くの企業、団体の協力を得ながら、産学連携のキャリア教育に力を入れ、4年間のカリキュラムで学生の社会的・職業的自立心をつくり上げる。ビジネス人の育成に特化した少人数教育、さらには教員のきめ細やかなサポートにより、高い就職率を実現している。「愛情教育」を謳う同大学で学び、その成果を誇りとして今年の就職戦線に立つ、同大学現代ビジネス学部4年生の平林大毅さんに、同大学での学びについて寄稿してもらった。

名古屋産業大学 現代ビジネス学部4年
平林（ひらばやし） 大毅（だいき）

〈なぜ卒研で共同研究？〉

「えっ、卒研を1年間で創るんですか？」忘れもしない2018年10月某日、専門ゼミの選考面接で、竹澤伸一先生に向かって私が投げた問いかけでした。竹澤先生は事も無げにこうおっしゃいました。「ほら、ここに証拠物件があるから、よく見てごらん」。『名古屋産業大学論集』第31号に掲載された、「スポーツにおける社会貢献―人的・物的貢献の諸相分析―」という論文を手渡された私は、まじまじと表紙を見た後でページをめくりました。竹澤ゼミ現4年生の4人の先輩と先生との共著論文が、紛れもなくそこにありました。2018年3月の発刊となると、この共著論文は4人の先輩が3年生の時に創られたことになります。私は頭が少々混乱してきました。卒研って、4年生で仕上げて提出するんだよな。

私の困惑ぶりを察知して、竹澤先生は順を追って解説してくださいました。「2017年4月、名産大着任と同時に受け持った3年生専門ゼミのメンバーがこの4人だったのさ。野球人3人、サッカー人1人の構成でね、卒研について話し合っていくうちに、4人でまとまって大きな研究がしたいとなったのさ。名産大は柔軟な大学だから、卒研の共同研究は認めてくれる。そこで私も加わって散々揉んで、『スポーツにおける社会貢献』という、案外日本では未開拓のテーマに行き着いた。そしてどうせなら、個々の研究のまとめは4年生でやるとして、そのベースになる共同研究の成果物は1年間で創って、それを持って企業等の面接に臨もうということになったんだよ」。

〈ビジネス系だからできる研究と就活の融合〉

それから半年後の2019年4月、私も「竹澤専門ゼミ2019」の研究同人10人の1人となっていました。2つ年上の先輩たちの共著論文に度肝を抜かれただけではなく、1つ年上、即ち「竹澤専門ゼミ2018」9人の先輩の2本の共著論文、「トレーニングを経済的付加価値とするキャリア思考」「いじめは絶対的経済的損失という思考」（共に名古屋産業大学竹澤研究室編『最新現代ビジネス研究』［ISSN 2434-4745］第1集、2019年3月刊所収）を、ゼミの初日にポンと渡されて、再び度肝を抜かれたのを覚えています。

しかも、4月の1週目の段階で、新4年生のうち4人が、最終面接かその1つ前で、「君の研究は何？」と聴かれ、「はい、これです」と『最新現代ビジネス研究』の冊子を提示し、面接官が驚愕し、早期内定につながったという実話を聞き、3度目の「度肝」を味わいました。そして「いよいよ今度は自分たちの番か」と気合が入りました。

〈たった1年で共著論文を仕上げる〉

「竹澤専門ゼミ2019」研究同人10人は、5人ずつ2つのグループに分かれ、「ビジネスに活用できるコミュニケーションの基本」と「ビジネスに活用できるリーダーシップの基本」という、それぞれのテーマ設定のもとで共同研究を始めました。コミュニケーションとリーダーシップにターゲットを絞ったのは、もともと名産大で推進されている職業教育の根底にある社会人基礎力の育成を、あえて単純化してコミュニケーションとリーダーシップに絞り、自分たちの就活に落とし込みつつ、研究レベルまで高めるというコンセプトを設定したからです。就活は就活、研究は研究と分けることはしないで統合するという発想です。

私自身は「コミュニケーション」班の一員として、他の4人と常に連絡を取り合いながら研究を重ねてきました。「共感コミュニケーション」の概念が発揮される事例を集め、本気の共感がビジネスシーンで発揮されるためには、自己抑制による接近と相手を丸ごと受容する寛容さを、最初は発揮する必要性を帰納的に導き出しました。「アサーション」「会話の質」「力の引き出し方」「勝つ組織づくり」という、他の4人の事例研究とキー概念のマトリックスを作成し、互いの研究成果の交流も頻繁におこないました。

〈ゼミの研究誌を企業面接で提示できる誇り〉

私は総合商社を中心に、BtoBの営業を展開する営業職に就くことを志望しています。2020年3月に解禁された就活戦線において、刊行されたばかりの『最新現代ビジネス研究』誌を力バンに忍ばせながら、インターンシップでお世話になった企業を中心に就活をおこないました。先輩たちに倣い、面接時に提示を求められれば、研究誌を取り出して誇りを持って説明しました。早期内定を勝ち取り、職業教育と研究と就活のマッチングの妙を強く感じているところです。